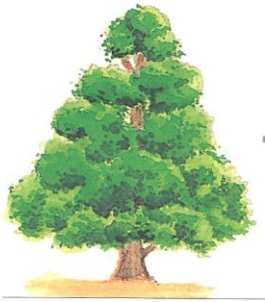
4年目のまだ若い街路樹

アーケードと接触して生長したプラタナス（写真はいずれも松山市内）

わずかな土地に植えられた街路樹



木と人間 8

さびしき街路樹

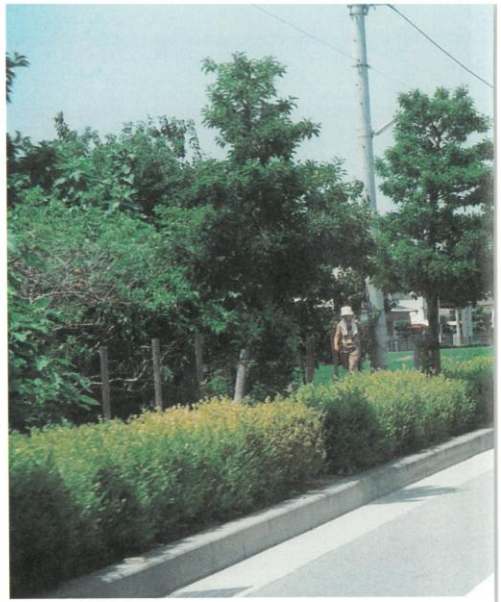
松山東雲短期大学
松井　宏光　Hiromitsu Matsui

街路樹は豊かな緑を演出することで、町に潤いをもたらす。高層ビルが立ち並ぶ近代的な都市に、まったく緑がないとしたら殺伐として息苦しい町に見えるだろう。

しかし多くの街路樹は歩道と車道の間のわずかな土地に植えられ、高温と乾燥、貧栄養など劣悪な環境で息も絶え絶えの状態にある。しかしもっとも彼らを苦しめているのは住民や行政担当者の街路樹に対する意識であろう。

高松市では一つの並木の街路樹管理について論議が二十年間も続いている。昭和二十四年に、高松駅から栗林公園までの「中央通り」の中央分離帯に二一四本のクスノキが植えられた。クスノキが樹高十mもの大木となった頃から、伸びすぎた枝葉の処理が道路管理者の頭を悩ませることになる。地元警察からは、信号の視認性悪化など交通安全面の理由で剪定の申し入れがある。しかし剪定するたびに市民団体からは剪定中止の要望が出された。市民団体も剪定中止で一致しているわけではなく、看板が見えにくいとか野鳥の糞害や落ち葉の舞い込みなどの苦情も寄せられた。昭和五十年代から官民巻き込んでの剪定騒動は、まだ決着が

大木となった街路樹は広い緑陰をつくる



上・生長することを期待されない街路樹
右・町のシンボルとなった平和通りのイチョウ並木

出ていない。

私たちの身近な街路樹の場合はどうだろうか。多くの街路樹が落葉時期の前に丸刈りされる。伸びすぎると、空中の電線に接触することも、街路灯の明かりを隠すことも、落ち葉が交通の支障になることも、沿線の看板や広告を隠すことも、信号やカーブミラーが見えにくくなることも、どれも丸刈り止む無しの意見である。街路樹を排除する理由を探せばいくらでもあるだろう。

しかし葉を刈られた樹木は哀れだ。都市の中で街路樹が伸び伸びと生きるための工夫はできないものだろうか。都市の緑は単なる道路の付属物ではない。緑量豊かな街路樹は、都市に必要不可欠な文化遺産である。

高松市中央通りのクスノキは、論議が続いている間に、大きなもので幹の太さ約六十cm、高さ十五mの大木に生長した。こうなると、誰しもが「中央通りのクスノキ並木」を高松市のシンボルと認めざるを得ない。市民と時間がクスノキ並木を守ったのだ。

まつい・ひろみつ　一九五二年、福山市生まれ。松山東雲短期大学教授。専門は植物社会学、環境教育。「四国樹木図鑑（仮題）」は夏に脱稿予定、つづいて「四国・巨樹遍路（仮題）」の編集作業が始まった。近年、東南アジアの魅力にはまっており、夏はフィリピンのセブ島で初のスキューバに挑戦。